



自頼奨学生 親子で清掃奉仕

もう重ねること5・6年にもなりました。6月の日曜日の午前中、我妻記念館の内外を清掃してくれる人たちがいます。その人たちとは、興譲館高で自頼奨学金を受けている学生と保護者20人ぐらいです。自頼奨学財団は、昭和41年に我妻榮先生の莫大な寄付をもとに設立されました。その利子を運用して、1学年数人に奨学金を給付しています。今日まで、その数269人にも達しています。自頼とは、榮先生の父親が興譲館で英語の教師をしていた時のあだ名「児雷さま」によるものです。ことしの清掃奉仕は6月23日に予定されています。

我妻榮記念館

だより

第 3 号

発行日/2002年3月31日

発行/我妻榮記念館事務局

☎992 0045

米沢市中央3-4-38

TEL 0238-24-2211

先人の心に学ぼう

我妻榮記念館館長 松野良寅

我妻先生の「講演集」を読み返してその論理の展開のすばらしさを感じ、しみじみと味わった。

切るわけにはいかないということ、自分自ら反省する時があってもよい。だるうと結んでおられる。

「鉄砲屋間」と言っている方が、私には甚だ懐かしい。それを「中央三丁目」なんて言われると自分の生まれた所のような気がしない。便利ということから考えると中央三丁目の方がはるかに普遍的だ。そういう合理性というものと、思い出というものと、一体どちらが大切なものか。そこにある一つの大きな違い：若い人とは、何でも合理的に、理論的にやってくれ、と言うでしょう。ところが段々年をとってくると、歴史とか、伝統とか、思い出とかいうものに執着する。そしてそれにとらわれるわけです。

これは昭和四十五年「論理的なもの」と歴史的なもの」と題して母校の後輩にされた講演の1節であるが、その終わりを「若いものは論理的なものを考えて、伝統というものに勇敢に反対するけれども、やはり自分が生まれ育った伝統というものは、そう簡単に振り

『我妻榮——人と時代』（平成九年刊）を編集しながら身内の方々や教え子、知己友人が業績や勤勉を讃えその人柄に敬服する寄稿の中で、「我妻榮は教えることが好きでまた上手でした」とある身内の方の述懐が実得的を得ていると実感したことを思い出した。得てして学者と名のつく人は理屈ばかりが達者というケースをよく見かける。しかし我妻先生は理屈にプラスして、明るい表情、明晰な発声、聴き手の心理を知り尽くした話術で話をなさる方だった。先生のような方を「教え方の上手な学者」と言うのであろう。

米沢には城下町特有の、よそ者を敬遠したり、大都市に腰を据える故郷への愛着も誇りも薄らぐという傾向が無きにもあらず。

井蛙的な盆地性や狹量な城下衆（「土族」）根性の偏執は、改めるべきであろう。

ゼンマイの煮付けで晩酌を楽しんだ宇佐美勝夫（口銀総裁宇佐美洵・宮内庁長官宇佐美毅の父）、イナゴの佃煮が大好きだった伊東

「まがき文庫」と子どもたち

興讓小 我妻 桂子

興讓小学校には、図書室の他に、「まがき文庫」の部屋があります。「まがき文庫」には、興讓小学校の大先輩であられる我妻榮先生が子どもたちのために贈ってくださった本が収められています。

昭和四十四年五月三十日、我妻先生ご夫妻が興讓小学校に来校された時に、七、四冊の本と、三組の書架を寄贈してくださいました。それ以来先生が亡くなられた今でも毎年本が贈り続けられています。

「まがき文庫」とは、我妻榮先生が名付けてくださいました「まがき」とは、竹や柴で組んだ垣根のことです。興讓小学校の創立記念式の歌の中からとられた、というものでした。

— 学びのそのの開けしは



毎年十二万冊もの図書が寄贈され、さまざまな分類の本が収められています。

なかでも、興讓小学校の学習指導の基礎である「学び方学習」とかわりのある調べ方に役に立つ本の充実が大きな特徴といえるでしょう。

子どもたちが自ら学ぶための道筋は、「さ・し・す・せ・そ」(さがす・しらべる・筋道を立てて考える・整理してまとめ確かめる・それを生かす)の五つにまとめられますが、その基本的な構造の「さ」はそれをどのようにして調べたらよいかを考える過程です。

学習を進めていくのに必要な資料を取り出して、それを分析したり、検証したりするのに、「まがき文庫」は子どもたちに広く活用されています。「まがき文庫」で学習したり読書している子どもたちは次のように感想を述べています。

「まがき文庫」はたくさん本があるから、社会や総合学習の調べもの時にとても役に立ちます。又国語辞典や漢和辞典等もあるので、分からないことがあっても調べることが出来ます。こんなすばらしい文庫をつくってくださった我妻榮先生に感謝します。

(太田沙佑里)

「まがき文庫」は、二、四年の総合学習で、障害者の学習をしました。その時、いろいろなことが分かっただけでなく、そのことがきっかけで、本を読むのが好きになりました。本は何度読んでもあきないので、とても不思議です。これからももっと「まがき文庫」の本が増えるといいなと思います。(浅尾真人)

「まがき文庫」は社会や理科や総合等、いろいろな教科の学習ができて便利です。机やイスがあつて友だちと話したり調べたり出来ます。(高山智之)

「まがき文庫」は僕の知らないことを一杯知っています。今の地球環境や恐竜時代のこと等、書いてある本もあり、興味がわいてきます。本は読めば読むほどおもしろくなってきました。(渡部等)

「学びの場を与えていて、子どもたちは自然に学ぶ姿勢が身についているようです。

もう一方では本を通して知識や視野を広げ、豊かな感性を育てている場ともいえるでしょう。

創立百二十周年(平成十二年)の式に我妻榮先生の御子息の堯先生に「世界の子どもたちについて」ご講演いただきました。我妻先生の思想にふられ、更に知性や感性が磨かれたようでした。「まがき文庫」の存在と我妻榮先生の精神は、子どもたちの成長にかかわり、大切に受け継がれています。

明治じゅうさん秋のころ
まがきの菊ともろともに
言葉の花は咲きそめぬ—
これが、興讓小学校の創立記念式の歌の一番の歌詞です。

創立記念式の日には、子どもたちは校歌とともにこの歌を歌います。そして、子どもたちの代表が、意見を発表する「まがきのつとむ」が行われます。大先輩であられる我妻榮先生の真実をみきわめる精神が受け継がれているようです。

「まがき文庫」は、年々蔵書数が増え、平成十四年三月現在では、五、四〇九冊にもなっています。その登録番号の一番は、「標準原色図鑑全集」です。

「僕は、二、四年の総合学習で、障害者の学習をしました。その時、いろいろなことが分かっただけでなく、そのことがきっかけで、本を読むのが好きになりました。本は何度読んでもあきないので、とても不思議です。これからももっと「まがき文庫」の本が増えるといいなと思います。(浅尾真人)

「まがき文庫」は社会や理科や総合等、いろいろな教科の学習ができて便利です。机やイスがあつて友だちと話したり調べたり出来ます。(高山智之)

「まがき文庫」は僕の知らないことを一杯知っています。今の地球環境や恐竜時代のこと等、書いてある本もあり、興味がわいてきます。本は読めば読むほどおもしろくなってきました。(渡部等)

「学びの場を与えていて、子どもたちは自然に学ぶ姿勢が身についているようです。

もう一方では本を通して知識や視野を広げ、豊かな感性を育てている場ともいえるでしょう。

創立百二十周年(平成十二年)の式に我妻榮先生の御子息の堯先生に「世界の子どもたちについて」ご講演いただきました。我妻先生の思想にふられ、更に知性や感性が磨かれたようでした。「まがき文庫」の存在と我妻榮先生の精神は、子どもたちの成長にかかわり、大切に受け継がれています。

忠太、打ち豆・冷や汁が定番の日常料理だった我妻榮——明治生まれの先人たちは、いずれも古里を離れて中央で活躍した日本を代表する人物、伝統の古里の味をこよなく愛惜した、典型的な米沢人根性の持主であった。

我妻榮記念館が発足して十年。新しい博物館も完成し、いよいよ米沢からの情報発信も活発化して来た。しかしこれからが米沢の本領が問われる時期である。物珍しさだけでは一過性の自己満足に過ぎない。また先人の業績紹介だけでは真の顕彰事業とは言えない。今こそ先人の知恵と努力と発想——「先人の心」——を「知り知らしめる」運動に地元を挙げて工夫すべき秋である。

愛国心、愛郷心などと声高に叫ぶ必要はさらさらない。一人ひとりが、この静謐な小さな城下町の良さを認め——生涯教育の一端として——郷里の歴史と伝統を知るために、身近な学習を根気強く積み重ねることである。その最も効果的な捷径の一つが、郷土研究の環境が整ったこの時期に、我妻榮先生や伊東忠太博士らの「寛容な人間性」に学ぶことである。我妻榮記念館の存在意義が生きているのも形骸化するのも、ひとえに郷土の人達の関心次第なのである。

× × ×

開館して10周年

記念事業として出前講演など

我妻榮記念館が開館したのは平成四年六月十九日のことですか。開して、ささやかな記念館ですが、成四年六月十九日となりす。存在をアピールしてきました。つまり、週三日開館して展示品やビデオの公開、平成九年十月には一連の生誕百年祭、更に我妻先生をはじめとする郷土の先人を紹介した図書類の出版など。来館者は、概して法曹界の方が多いようです。



▲記念館事業のひとつ。我妻先生が、川西町高山小学校で講演。平成12年5月

この十周年を記念して、

新たな催しものを、と、考えますが、予算の制約もあり、なるべく事業費のかからないものとして、次のようなことを行う予定です。

- 出前講演会（地域や職場・学校・学級、子ども会などからの要請に応じて、館長や運営委員が講師にあたる）
- 土・日の開館（目下のところ火・木・金の午前1時から四時までとしていますが、六月は火曜日の午前1時から四時までと、土・日の午後、時から五時までとします）
- 記念館だより十年のあゆみ特集
- 我妻記念館の叢書刊行（内容は未定）
- 館内展示物の充実・入れ替え。
- 建物の補修。
- 我妻先生を偲ぶ集い。
- その他

あの時の時

忘れ得ぬ言葉

もう五十年前のことだが、講演のなかで「法律を無視するの愚か、楯にするのも愚か」と語られました。つまり、法律は、人或は社会にとって実に大切なものだが、法律によって人又は社会が拘束されるものではない。法の運用には人間の英知が必要だ!! と解釈をつけ加えられましたが、けだし名言と今も私の胸にひびいています。〈徳町・大久保光夫〉

鉢植ぶどうを届ける

こちらも、もう三十年もむかしのこと。先生が法務省の特別顧問をしてもらった時のこと。当時の米沢市長故吉池慶太郎氏は、我妻先生を心から崇敬しておられ、帰郷なさると市長車を運転手付きで

提供するのが常でした。今でこそ珍しくないものですが、鉢植ぶどうが出まわりはじめた時、これを先生にお届けすればどれ程お喜びになることか。、即実行と相成った次第。当時の秘書私は、それを電車で積んで法務省特別顧問室まで。生憎、先生はお留守でしたが、対応してくれた和田鈴子さんはびっくり。後に先生から市長宛に大喜びのお礼と、運び屋の私をねぎらう書簡が届きました。

その鉢、何せ大鉢で重く、上野駅から小型トラックをチャーターしなければならぬほどの代物だった上に、しかも残暑酷いなか、それは、それはつらい運び屋役でした。〈事務局長 小関 薫〉

記念館スタッフ

- ▼名誉館長 我妻堯
- ▼館長 松野良寅
- ▼運営委員 遠藤拓、川野希、今田久夫、佐野清二、本多一彦
- ▼事務局長 小関薫
- ▼管理人 神田倉

我妻榮記念館の開館日

毎週火・木・金曜日 午前10時～午後4時
 （但し、十四年六月は火曜日の午前10時から午後四時まで、土・日曜日の午後一時から五時まで）

TEL 〇三三八一二四一三二二

管理人 神田倉一（自宅 三三六一八五）

来館者日誌から

▶13年4月25日 山形検察庁米沢支部 検事 井上一郎 総括検務官 東海林憲夫 ▶4月29日 全国市議会議員会々長、京都市会議長 三之湯 智 同市会事務局次長 能田 修 ▶5月10日 仙台検察庁検事総長 北島敬介 外3名 ▶5月11日 仙台高等裁判所長官 富田仁郎 外4名 ▶5月31日 埼玉県深谷市立上柴中学3年生 6名 ▶6月23日 自願奨学生親子 我妻先生に学ぶ 18名 ▶7月24日 山形地方裁判所55期司法修習生 5名 ▶7月29日 南陽市立結城豊太郎記念館 館長 岩間 進 (敬称略)

13年度 火種塾

隔月の第一日曜日、朝7時から1時間程度、火種塾主催の学習会が開かれています。以下は13年度のものです。

- 5月6日 金田祐作氏 21名
「米沢の金融業」
- 7月1日 川島良博氏 26名
「米沢の生んだ偉大な作曲家 大沼哲」
- 9月2日 近 厚氏 18名
「高橋里美」
- 11月4日 松野良寅氏 17名
「池田家の人々」
- 1月13日 高坂順子氏 20名
「江戸時代、米沢庶民の食生活」
- 3月3日 安部三三郎氏 15名
「キリシタン殉教、新洞ヶ台の信者」

米沢有為会 我妻記念館 ホームページ

<http://www1.ocn.ne.jp/~symikai/index.html>

『生きても十五歳』を読んで

米・中三年 安部 美 希

もうすぐ私は十五歳。そして、この本の著者である井上美由紀さんも十五歳だ。

美由紀さんの母は、夫を交通事故で亡くし、そのショックで早産したため、美由紀さんは、超未熟



第9回、我妻榮児童文化賞の表彰式が2月23日に市内ホテルサンルートで行われた。表彰を受けたのは、書道に励み、大賞を受賞した磯貝友希さん（興譲小6年）と、読書感想文で山形県最優秀賞を受賞する安部美希さん（米・中3年）でした。

我妻榮児童文化賞

弘法大師賞に輝く

興譲小6年 磯貝友希

昨年開催された第三十六回弘法大師奉賛高野山競書大会には、全国から十二万四千六百七十五点が寄せられ、最高賞の弘法大師賞には学生の部六人、一般の部二人が選ばれました。準賞が内閣総理大臣賞ですから、いかに権威が高いかがわかります。その学生の部六人のうち一人が磯貝さん、というから凄い。磯貝さんは一年生の時から書道を習っているそうです。今後のホープはこの賞を励みにして、つけ、とめ、はね、強弱などに注意して、さらにがんばって続けていきます。……と。今後の活躍を期待しましょう。

まった。

初めてのミルクは、鼻から一ccだけだったそうで、びっくりしたけれど、初のミルクが、母の手からもらったものでないなんて、とてもかわいそうだし、きつとおいしくなかったと思う。いつ命が果てもおかしくない状態だったのが、一日一日を必死で生きた美由紀さんからは、小さな小さな命だけれど、とても大きな大きな命の力が伝わってきて、感動した。

また、美由紀さんの手に母がそつと指をのせると、その指をギョッとにぎったのである。きつと、「私は生きてるよ。大丈夫だよ」ということを伝えたかったのだと思うし、この時からもう、親子の固いきずなが生まれていたのだと思う。

美由紀さんが五か月の時、またしてもショックなでき事がおこった。それは、美由紀さんの目は見えない」ということだ。美由紀さんは、父にも会えず、たった一人

の家族である母の顔さえも一度も見ることができないのだと思う

と、私は、切なくて涙があふれた。この世界には、美しい花や、山などのたくさん緑、海など、たくさんきれいなものがあり、そのすべてが私には見える。しかし、美由紀さんには何ひとつ見えないのだ。こんなきれいな世界を見ることができないなんて、とてもかわいそうだし、「見せてあげたい」と強く思った。

私は、ポランテアで、アイマスクをし、目が見えない人の体験をしたことがある。その時は、目の前が真っ暗闇で、「歩こう」と思っても、不安と、見えない恐怖が、私の足をガッチガチに固めてしまった。やつとで歩けても、五分もたたないうちにアイマスクを外してしまった。十五年間もこんな感じだった美由紀さんは、とても強いなあと思うと同時に、同じ年である私は、見えない世界に五分も耐えられないなんて、情けないし、とても恥ずかしい。

しかし、美由紀さんがこんなに強いのも、今まで一人で育ててくれた母の支えがあったからだ。幼児期のころから、母は、美由紀さんが転んで怪我をしても知らんふり、階段から落ちてでも助けなかったそう、相当厳しかった。でも、それは全て、美由紀さんの将来を思っている愛情だった。私は、なん

だか、とてもあったかい気持ちになった。

「厳しい母のおかげで、美由紀さんはどんどん成長した。自転車に乗れるし、料理が大好きで、包丁だって使える。「目が見えないとできないことが多いのでは？」という私の考えを、美由紀さんは、あつという間にくつがえした。そして、「努力すればできる」ということと、「何でもやってみなきゃわからない」というチャレンジすることの大切さを教えてくれた。

そんな美由紀さんでも、中学一年生の頃、精神的ストレスから痛みをよびになり、母に「自殺したい」と言った。母は、「死にたいなら殺してあげる。」と、本気で首を絞めた。私は、思わぬ展開に息を飲んだ。だが母は、今まで一生懸命に育てた一人の娘の思いもよらぬ言葉に、本当はすごく辛くて、ショックだったと思う。そして、苦しくて辛くて、「死にたい」なんて決して口にはいけなと思うし、改めて命の大切さを実感し、ちよつと大げさかもしれない喜びを感じた。

美由紀さんは、なおも私をびくりさせた。なんと、全国盲学校弁論大会に出場し、「優勝」したのだ。本当にすごい。私まで、自分のことのようにうれしくなった。

小六

の文 町化

磯貝友希